

前漢匈奴地名略攷

駒井義明

本論文は史記匈奴傳及漢書匈奴傳に並び現れたる匈奴地名を現今に比定し、よつて以て前漢時代匈奴活動の範圍を知らんと欲する者なり。略攷と稱せしは唯大略を述ぶるの意なり。

又、中に就て現代大家の説ある者は若輩の身、之にふれざる事とせり。

此種の研究に就ては清朝丁謙氏の浙江圖書館叢書中に漢書匈奴傳地理考證二卷及び De Groot 氏の漢書匈奴傳を譯し少しく意見を述べし Die Hunnen der Vorchristlichen Zeit 等あれり前者は餘りに獨斷的にて見るべき所少く後者は殆原文の譯のみにて氏の意見少し。之又若輩を省みず、此論文を草する一因なり。今本論に入るに先立ち便宜

上、此に論ずる地名を列擧するに次の如し。

史記及漢書匈奴傳に共通なるもの

- (イ) 龍城(或は龍城)
- (ロ) 蹕林
- (ハ) 蕪望之地
- (ニ) 狼居胥山、姑衍、翰海
- (ホ) 闐顔山
- (ヘ) 浮直井
- (ト) 匈奴河水
- (チ) 受降城
- (リ) 浚稽山
- (ヌ) 盧朐
- (ル) 涿邪山
- (テ) 余吾水 等

史記匈奴傳なく漢書匈奴傳(上)のみに見ゆるもの。こゝには論ぜず。

(ワ) 夫羊句山狹、范夫人城

(カ) 蒲離候水

(ヨ) 烏員 候山

(タ) 丹余吾水 等

漢書匈奴傳(下)に見ゆるもの。こゝには論ぜず

(レ) 闊敦地

(ソ) 噤姑地

(ツ) 諾水東山

(ネ) 休屯井、車田廬水

(ナ) 零吾水 等

扱此等匈奴地比定の根據たる前漢時代北邊諸郡の位置に關しては古來略、定説あれど今は漢書地理志により各郡の首縣を知り之を楊守敬水經注圖により現今に比定せり。今東方より西方に表示すれば次の如し。

遼東郡 遼治 襄平縣 奉天省遼瀋道遼陽縣西北

遼西郡	同	且慮縣	直隸省津海道盧龍縣東
右北平郡	同	平剛縣	同 省同 道玉田縣附近
漁陽郡	同	漁陽縣	京兆密雲縣
上谷郡	同	沮陽縣	同 省口北道懷來縣
代郡	同	桑乾縣	同 省同 道蔚縣東北
雁門郡	同	善無縣	山西省雁門道右玉縣
定襄郡	<small>遼</small>	成樂縣	綏遠特別區域 <small>托克托</small>
雲中郡	<small>遼</small>	雲中縣	同 地方
五原郡	同 <small>(秦九原郡)</small>	九原縣	綏遠特別區域包頭西北
朔方郡	<small>遼</small>	三封縣	オールドス右翼後旗
西河郡	同	富昌縣	オールドス左翼中旗北
上郡	<small>遼</small>	膚施縣	陝西省榆林道榆林縣東南
北地郡	同	馬領縣	甘肅省涇原道慶陽縣北
隴西郡	同	狄道縣	同 省蘭山道狄道縣
金城郡	<small>遼</small>	允吾縣	同 省西寧道循化縣東北
武威郡	同	姑臧縣	同 省甘涼道武威縣
張掖郡	同	驪得縣	同 省同道張掖縣
酒泉郡	同	祿福縣	同 省安肅道酒泉縣

敦煌郡 同 敦煌縣 同 省同 道敦煌縣

本論 (東亞輿地圖蒙古方面參照)

史記及漢書匈奴傳に共通に見ゆるもの

(イ) 龍城

史記匈奴傳に匈奴毎年の風習を誌して

五月大會龍城龍城、祭其先・天地・鬼神

とあり、此の龍城の位置問題なるも其位置を明示せる史料なき故之が決定は殆なし難く唯それに關聯せる史料により大體を推定せんのみ、漢書李陵

傳卷五十四に李陵が武帝天漢二年に出塞して匈奴單于

と戰ひ浚稽山に至り此處より引返せるを誌して、

陵且戰且引南行數日抵山谷中……引兵東南循故龍

城、道行四五日抵大澤葭葦中……とあり。之により龍

城は浚稽山の東南の方向に位する如く考へらる。

且、同傳に李陵の單獨北伐に對し之が案内をなす

べき路博德が之を恥ぢて上言せる中に方秋匈奴馬

肥、未可與戰、臣願留陵至春俱將酒泉。張掖騎各

五千人、並擊東西浚稽可必禽也(單于)とあるに顏

師古注して浚稽、山名、時虜分居此兩山也云々と

云へる如く當時匈奴が浚稽山附近に居れる如けれ

ば祭をなせる龍城の地も亦此附近に求めらるべき

なり。故に彼此參考して龍城の地を浚稽山即外蒙

古三音諾顏部アルツイボグド山(脈)別のの南、楚

渾山(脈)の北シリビス内河流域附近とせん百萬分一

圖昌寧湖號參照。此處に於て匈奴が五月に大會して其先・天

地・鬼神を祀れりと云ふなり。

扱索隱は崔浩云北魏道武帝時代の學者西方胡皆事龍神、故名

大會處爲龍城と云へるが西方胡が龍神に仕ふとは

印度邊の事を含めるものとして可なるも故名大會

處云々と西方胡に非る北方の匈奴に結合せるは非

なり。況や龍城は史記前文に祭其先・天地・鬼神と

ありて龍神には何等關係なく全くの地名なるに於

ておや。但、龍城或龍城は匈奴の稱呼に非ずして

支那の稱呼ならん。而して史記本文により匈奴に

ては毎年五月龍城に大會して其先・天地・鬼神を祭る風習の存せし事知らるゝなるが欽定滿洲源流考卷十の祭天の事匈奴が其先・天地・鬼神を祭る事は五月龍城に於てのみには限らざりしが如し。何となれば此に引用せる史記の直ぐ前文なる歲正月諸長小會漢書少字に誤單于庭祠なる文が小會・大會と對立して祭其先・天地・鬼神にかゝると解するの穩當なるを覺ゆる故なり。故に匈奴の祖先祭は正月は單于の庭に於て五月は龍城に於てせられたるならん。従つて史記索隱も引ける後漢書匈奴傳に匈奴俗、歲有三龍祠、常以正月・五月・九月戊日祭天神とは正月・五月 九月戊日に祖先祭ありて五月龍城に行はるゝものが特に大會なりし故、龍城の祠なる龍祠なる名稱が正月及九月の祖先祭にも移れるならん。龍城の祠の例は漢書昭帝紀始元二年條に於是二王左賢王（谷麋）去居其所、未嘗肯會龍城とあるは之なり。他の二龍祠の例につきては正月の龍祠は他に其の記事

見えざれども五月のは前掲史記の文の外に後漢書匈奴傳に建武二年會、五月龍祠三あり、又九月龍祠の記事は十三年同傳に：其年章帝二年七月單于南單于上言：九月龍祠悉集河上とあるは之なり。即、九月の祖先祭は河上即黃河のオルドス邊にて行はれしに非ずやと考へらる。仍て思ふに匈奴に於ける年三回の祖先祭は單于庭・龍城・河上と正月・五月・九月の三時季により次第に北より南の地に向ひ行はれたるらしく、而して漢との交戦によりその或者は行はれざりし事もありしならん。河上龍祠の如きは此例らしく殊に漢武帝が匈奴より河南地を取り戻し朔方郡等を置ける後は南單于が河南に地を賜はる迄河上の龍祠は行はれざりしならんか。以上にて龍城の位置・龍祠の何者たるか略明になれるが龍祠は單に祭事のみならず非りしなり。即後漢書匈奴傳に單于每龍會議事とあり又同傳に先に引ける三龍祠の直ぐ續文に南單于既内附兼祠漢帝、因會諸部、議國事

走馬及駱駝爲樂とある如く夫を祭ると共に後には漢帝をも祭るに至り、又元代クリールタイの如く國事を議し又諸部落の懇親會を兼ねし事知らるゝなり。尙匈奴祭天に關し休屠王の祭天金人も觸れらるべきなれど諸家により多く論せられたれば今述べず。

次に注意すべきは匈奴が祖先祭をなせる外に別の龍城あることなり。卽史記匈奴傳に

自馬邑軍後五年之秋、漢使四將軍各萬騎擊胡關市下、

將軍衛青出上谷至龍城、得胡首虜七百人

とあるは之なり漢書匈奴傳龍城、史記衛青傳龍城、漢書衛青傳龍城……此年は元光六年なり四將

軍とは衛青・公孫賀・公孫敖・李廣の四將軍なること

は直ぐ下文にあり。扱漢代の上谷郡治沮陽縣は今の

直隸省口北道懷來縣にして東に位し、匈奴大會の

龍城は先に考證せし如く遙か西方なれば此に見ゆ

る龍城と關係なきは明なり。

次に考ふべきは胡關市なる語なり。胡は匈奴な

前漢匈奴地名略攷 (駒井)

るは云ふを俟たざるも、關市は貿易する事又は貿易場の意なるが此にては擊胡關市下とあれば明に後の意味なり。今史記匈奴傳別條を見るに自是之後孝景帝復與匈奴和親、通關市、……今帝(武帝)卽位明和親、約束厚遇、通關市、饒給之、匈奴自單于以下皆親漢、往來長城下とあり。此は武帝卽位の初めに匈奴と和親して單于以下が萬里長城下に來りて關市卽貿易をなせりと云ふなり。よく考ふれば四將軍が撃てる胡關市下とは萬里長城下にありし匈奴を討てるに他ならざるなり。當時匈奴が長城以内にもありしならんとは武帝の元朔二年に今のオルドスの地の匈奴を追拂ひて朔方郡治三封縣今のオルドス右翌翼同翼に後旗を置けるにても察せらるゝなり故に衛青が上谷郡を出て討てる龍城は長城内外近傍なりしは疑なし、丁謙も漢書匈奴傳地理考證上に祖先祭の龍城と區別して衛青所至之龍城、據讀史兵略滿胡林翼注、在察哈爾左翼旗界、非漠北單于建

第十五卷 第三號 三九七

庭處と云へるが従ふべきに似たり。

(ロ) 蹕林

史記匈奴傳に於て漢書匈奴傳同匈奴の慣習を誌したる

處に(イ)の龍城の直ぐ下文に

秋馬肥、大會龍林、課校人畜(計)とあり史記にては計字を

下文につけ計其法云々せざるに漢書は課校人畜計とせり、計を數の意にたり漢書に從はん

此に見ゆる龍林は位置全く不明なり。或は河上

に行はるゝ秋の龍洞に關係あるやも知れざるも確

かには云ひ難し。故に此にては諸家の註を引きそ

の異說多きを示さん。

史記駟案、漢書音義(後漢)曰匈奴秋社、八月中皆會祭處

蹕音帶、

史記鄭氏云、蹕林地名也、晉灼(人)曰、李陵與蘇武書

云相競蹕蹕林、則服虔說是也、又韋昭(人)音多藍反、

姚氏案、李牧傳大破匈奴、滅檐檻、此字與韋昭音頗同、

然林檻聲相近、或以林爲檻也。

史記顏師古云、蹕者遶林木而祭也、解詳卓之俗自古相傳、秋祭無林木者尙豎柳枝、衆騎馳遶三周乃止、此

其遺法也。

漢書服虔曰蹕音帶、匈奴秋社、八月中會祭處也、師古

曰、蹕者繞林木而祭也、鮮卓之俗自古相傳、秋天之祭

無林木者尙豎柳枝、衆騎馳遶三周廼止、此其遺法、計

者人畜之數

以上の說の中にて最も穩當と思はるゝは服虔秋

社の說なれどその位置定め難し。

次に注意すべきは史記索隱が引ける說の中姚氏

兼姚思の蹕林を以て史記李牧傳の檐檻に比定せんと

する說なり、今史記卷八同傳を見るに李牧者趙之

北邊良將也、常居代、雁門、備匈奴……大破殺匈奴

十餘万騎滅檐檻とあるは之なり。然れども愚生は

匈奴十餘万騎を殺すと滅檐檻とは全く別の事とし

姚氏の蹕林即檐檻說には從はざるなり。愚考する

に檐檻は匈奴に關係なく音韻上、形勢上即丁零な

らんと思はる。即ち匈奴を伐てる序に丁零を討て

りと思ふと見るなり。檐檻につき史記集解は駟案

襜都甘反、襜路談反、徐廣(晉人)曰一作臨、駟又案如淳曰胡名也、在代北と云へるが、徐廣に依れば襜襜は又襜臨に作るに云へば其音益、丁零に近く如淳の胡名也、在代北は明に襜襜の丁零なる事を示せるが如し、云ふ迄もなく丁零は山海經海内經に有釘靈國。其民從膝已下有毛、馬蹄善走とある釘靈にて北魏時代の鐵勒異名高車なり。

蹕林なる地名は史記には以上の如く見え以後見えざれども舊唐書鐵勒傳に太宗貞觀二十二年薛延陀の亡散によりその思結別部を蹕林州となすと見ゆるあり、舊唐書地理志卷四 河西道にも蹕林州見ゆ。

(一六) 薪望之地(未詳)

(一七) 狼居胥山、姑衍、翰海

史記匈奴傳に

其明年(武帝元狩四年春)漢驃騎將軍(霍去病)之出代二千餘里、與左賢王接戰……驃騎封於狼居胥山、禪姑衍、臨翰海而還

前漢匈奴地名略攷 (駒井)

とあり、漢書匈奴傳全く同じ、又史記霍去病傳にては少しく異りて出代・有北平千餘里(漢書同傳二千餘里とある方正し)直左方とあり

此に見ゆる狼居胥山姑衍山の位置の比定困難にして支那注釋家注せざる故一層困難なり。今前文にて注意すべきは匈奴傳に與左賢王接戰とあるに對し霍去病傳には同事實を直左方と記せる事なり。更に史記匈奴傳の別處に(匈奴の)諸左方王將居東方直上谷、以往者東接穢貉朝鮮……とあるを參照すべし。此文は匈奴の左方は即東方にて左賢王等は此方面に居り且つ其所は上谷郡の北方に當るを示す。而して上谷郡は前出の如く直隸省古北道懷來縣なり。以上の記事により驃騎將軍は代郡を出で畧直北に二千餘里進めるならんと推定さる。代郡はその位置上谷郡のそれに近き故なり漢書によれば代郡の首縣は桑乾縣にて楊氏水經注圖により直隸省口北道蔚縣の東北にて桑乾河に臨みし事知らる、又霍去病傳に見ゆる古北平郡の首縣は同じく平剛縣なる事知られ現在の位置同様に求めらるべき管なれど平剛縣は前漢のみにて以後見えざる故後漢の郡治土垠縣により直隸省津海道玉田縣附近とせん 扱次に考ふべきは此等漢北邊諸郡よ

第十五卷 第三號 三九九

り匈奴某地に至る距離を示せる里數なり。此等は固より漢代里數にて現今のものに非れば現代地圖上にて位置の攷定をなす際には現時の里數に計算換するを要す。今此等幕北の里數を計る基準として洛陽長安間の里數を取らんにその距離現今地圖により官道にて計るに七百里勿論支那里數に近し。此兩地間の距離は後漢書郡國志により漢代にては九百五十里と計算せし事知られたり。但し漢代にても大體今日の官道による距離を示せるものとするなり。故に以上により大體漢代の千里を今日の七百里と見て可ならん。

よつて驃騎將軍が代郡を出づる事二千餘里にして到れりてふ狼居胥山の位置は大體、車臣汗部の巴圖汗斯奇雅諸山中に求めらるべし。又狼居胥山に封し姑衍に禪すと云へば、封禪の性質上姑衍山も亦その近く此山脈中の一峯に求めらるべし。封禪に關しては禮記の王制には望秩の事のみにて見

えざれども史記封禪書に詳しく見えたり。

又史記匈奴傳別條に諸(漢書)大臣皆世官、呼衍氏・蘭氏(正義)呼延者也。蘭姓今亦有之。須卜氏(正義)後漢書云呼衍氏須主獄訟(義)下氏常與單于解婚。此三姓其貴種也と見えたるが、愚考するに、蓋しこの呼衍氏は姑衍山に其名を負へるなるべし。而して姑衍山・呼衍氏・居延澤は皆同一の匈奴音を寫せるなるべく胸衍之戎の胸衍も亦然らん。

次に問題となるは翰海なり。今便宜上、古人の註をあぐるに次の如し。

史記匈奴傳如淳(人稱)曰翰海北海名。

(正義)按翰海自一大海名、群鳥解羽、伏乳於此、因名也。

史記匈奴傳案崔浩云北海名、群鳥之所解羽、故云翰海、

廣志(晉郡)在沙漠北。

此等により後世にては翰海と云はゞ皆蒙古大沙漠の稱なるに往時は然らずして固有名たりし事知

らるゝなり。即以上の諸注釋は翰海は北海名となす。共に翰を羽の義に解し群鳥が此海邊にて卵をかへす故なりとせり。此說從ふべきに似たり。但翰字の原義は説文によれば翰天雞也、赤羽、从羽、从彖、逸周書曰文翰若羣雉、一名鷓風、周成王時蜀人獻之、見え天雞即野雞なるた知るなり。

扱翰海が北海名なりとせば現今の何に當れるや。之につき直ちに頭に浮ぶはバイカル湖にして次は大き劣れども呼倫湖及貝爾湖なり。而して史記及漢書蘇武傳によればバイカル湖は單に北海と呼ばれし事知らるゝ故、翰海は呼倫湖或は貝爾湖を指せるや明なり。而して此兩湖の中初めて史上に見ゆるは呼倫湖が唐書室韋傳に於て俱倫泊舊唐書俱倫泊とあること及狼居胥山・姑衍山が巴圖汗斯奇雅諸山中に求めらるゝとせば、霍去病は此兩山に封禪せし後ケルレン河に沿ひて下れりと見て、翰海は即唐代の俱倫泊現代の呼倫湖なりと云はんとす。

今山海經海内西經を見るに大澤方百里、群鳥所生及

前漢匈奴地名略攷 (駒井)

所解百鳥於此生乳解之毛羽在雁門北とあり。更に山海經同經に東胡在大澤東とあるが兩大澤は一ヶ所を指せるが如く東胡の位置及雁門郡の位置山西省雁門道右玉縣より考ふるに大澤が呼倫湖を指せるや略疑なかるべし。而して史記及漢書注釋家が云へる文章は此の山海經の文章に關せる如ければ、そが翰海即大澤即呼倫湖の意なるべしと考ふるも誤には非るべし。故に余は匈奴傳翰海即山海經大澤即現代呼倫湖なりと信ず。

今魏書蠕々傳を見るに(社崙の世)……其西則焉耆之地、東則朝鮮地、北則渡沙漠窮瀚海、南則臨大磧とあり、同じく別條に神龜二年太武帝六月、車駕次於兔園水、玄平城三千七百里、分軍搜討、東至瀚海、西接張掖水、北渡燕然山、東西五千餘里南北三千里とありて瀚海(翰海に同じ)の名見ゆるが此の瀚海は何を指せるか。兔園水がトラ河なる事は箭内博士東洋讀史地圖第十にも見ゆ。今、元

第十五卷 第三號 四〇一

の張德輝の塞北紀行を見るに自黑山之陽西南行九驛：復臨一河：北語云渾獨刺、漢言原兎兒也とあるが此書尾の胡祥錄附言に漢言下闕一字、沈本（烏程沈眞人西遊記金山以東釋）下有兎字とあるにより此處の文は渾獨刺、漢言兎兒なること知られ渾獨刺即刺獨即兎兒にて即兎園水なりとして誤なきが如し。又平城は北魏の都にて今の山西省雁門道大同縣に當る。此に引ける魏書の二文中前文に北則渡沙漠、窮瀚海とあるにより後世の如く翰海即沙漠の意に非るは明なるが、後文にては更に兎園水即トラ河を中心として東至瀚海とせるなれば翰海即呼倫湖として誤なからん。又兎園水の位置よりして燕然山即肯特山なる事も疑なかるべし。かく北魏時代にても翰海は沙漠に非ずして一固有名たりし事知らるゝなり。

魏書蠕々傳には此の翰海の外匈奴と同一なる地名多く現れ（例へば燕然山・涿邪山）且つ以後漠北にかゝる地名見えざる事を併考し、魏書同傳には蠕々は東胡之苗

裔とあれども然らずして匈奴の裔に非ずやと考へらる今魏書蠕々傳の劈頭に云へり……蠕々東胡之苗裔也、姓郁久闐氏、始神元之末（元思遠）掠騎有得一奴、髮始齊眉、忘本姓名、其主字之曰木骨闐、木骨闐者首秃也、木骨闐與郁久闐聲相近、故後子孫因以爲氏、木骨闐既壯、免奴爲騎卒、穆帝時坐後期、當斬、亡匿廣漠雞谷間、收合逋逃、得百餘人、依純隣部、木骨闐死、子車鹿會雄健、始有部衆、自號柔然、而役屬於國、後世祖以其無知狀類蟲、故改其號爲蠕々云々

以上によれば蠕々蠕々は柔然の體なるべく柔然は純隣部の體なりの始祖の名は木骨闐にて其姓郁久闐も亦木骨闐の轉化なるがその意は首秃なり、即ち始祖の名が部族名になれるなり、愚考するに木骨闐は即ち蒙古（蒙兀・蒙兀も書す）の原音に非るか愚生は爾信するなり、故に蒙古即木骨闐にて木骨闐即首秃の意とせば蒙古即ち首秃なり、寔に蒙古の字義として適當なるを覺ゆるなり、此北方民族の髡頭首秃は此にては髡頭の意なりの風を云へるなるべし、但し普通には蒙古は銀を意味す云はれ又ドーソンの如きは「蒙古

は素撲羸瘦の義なり」甲中氏譯 本十九頁云へり。此等の説が成
立すこせば蒙古即首禿説も成立するに非るか、扱蒙古
なる名稱が柔然に出で且つ地名等より考へ柔然は匈奴
の裔なりこせば匈奴は即蒙古種に非るか、愚生はしか
信ずるなり。

以上の如く北魏に於ては翰海は漢代と同じく今
の呼倫湖を指せるも唐代に至りては少しく其内容
を異にせり。即舊唐書鐵勒傳に貞觀四年平突厥頡利
之後、朔塞空虛、夷男率其部東返故國、建庭於都
尉撻山北、獨邏河之南、在京師北三千三百里、東
至室韋、西至金山、南至突厥、北臨瀚海、即古匈
奴之故地とあるはトラ河を中心とせる四至なれば
北臨瀚海の瀚海はバイカル湖を指せるや疑なし。
又同傳太宗貞觀二十年詔に鐵勒諸帥入朝降伏：收
其瀚海盡入提封とある瀚海はそれを以て提封即諸
侯の封地に入るとあれば沙漠を指せるが如し。故
に唐代にては漢南北朝と異り瀚海と云へはバイカ

ル湖或は沙漠を指せるならん。次に宋代に於ては
北方に遼・金・元の起るありし爲め北方の事情に通
せず従つて翰海の意義も不明なりしが如し。一例
を程大昌の北邊備對に取るにバイカル湖・瀚海・北
海を同一視せし事うかがはれ沙漠は單に大漠と稱
せしが如し。扱元代にては沙漠は沙陀と稱し瀚海
なる名稱見えざる様なれども明・清及現代にては
瀚海と云はゞ皆今の長城外の沙漠殊に戈壁の様な
り、故に要約せば瀚海は漢六朝時代には今の呼倫
湖を稱し唐宋時代にはバイカル湖を稱し明・清及
現代にては塞外大沙漠の稱となれり。

De Grootは前掲著書の百四拾頁に於て霍去病傳
に登臨翰海とあると音韻上とより翰海即杭愛とせ
るも其條の集解に張晏曰登海邊山以望海也とある
如く翰海は猶海とすべし。

次に問題となるは漢六朝時代に翰海を以てし唐
代に俱倫泊を以て稱されし今の呼倫湖がその後如

何に呼ばれしかなり。宋代は措き元代には又有名
になれり。卽元朝秘史に捕魚兒納活兒(明) 捕魚兒(明)

海子)に並び闊連納活兒(明) 闊連海子)と呼ばれし

は明に唐代の俱倫泊なり成吉思汗實錄卅一頁、李文田元朝秘史山川地名考、浙江圖書館叢書第二集丁謙氏元秘史地理考證卷一の十一丁等に呼倫湖の事見ゆ、又元史譯文證補卷一上に成吉思汗が王罕の離反を責めし語中に見ゆる捕魚兒、元朝秘史の闊連納活兒は即明代の闊連海子即清及現代の呼倫湖なり

なり朔方備乘卷十一北徼形勢考呼倫貝爾城形勢、同卷二十四長維諸水考の中、額爾古訥河條に呼倫湖の事詳に見えたり、蒙古源流には呼倫湖の事特に見えず、唯、卷三の二十一丁に鄂諾河下游呼倫貝爾地方と見えしのみ。

附言 先に魏書婦々傳の文を引けるが其文に見ゆる燕然山は寇

ありと云へば今の肯特山脈に相違なき故、燕然山を以て今の肯

特山とせるが、蒙古游牧記を見るに卷七土謝圖汗條首に杭愛山

の下に多くの説を集めたるが中に：杭愛譯言案駝也、山形似之、

一統志按當卽古之燕然とて一統志の杭愛山即燕然山説に従へる

が愚生は叙上の如く燕然山は杭愛山に非ずして肯特山とせん、

肯特山の事は蒙古游牧記七土謝圖汗中旗條に見ゆるは上述の如

くなるが同條下に汗山を説明して汗山亦曰怒山：土喇河南岸、

元秘史謂之不見罕山と云へるも秘史の不見罕山が肯特山脈中に

求めらるべきは異論なき故此説非なり。此に見ゆる土喇河南の

汗山又怒山は舊唐書鐵勒傳に見ゆる夷男鐵勒、薛延陀甚喜、
四年(貞觀)平突厥頡利之後朔塞空虛、夷男率其部東歸故國、建
庭於都尉提山北獨邏河之南云々の薛延陀の庭都尉提山ならん。

(ホ) 闊顔山(趙信城)

史記匈奴傳に

其明年春(元狩)大將軍(衛)出定襄、驃騎將軍(霍去)

出代、咸約絕幕擊匈奴……軍于(伊稚)塗獨身與壯

騎數百潰漢圍西北遁走、漢兵……北至闊顔山趙信

城而還とあり、同事實を史記衛青傳に軍(大將)出塞

千餘里見單于兵……遲明行二百餘里……不得單于

頗捕斬首虜萬餘級、遂至眞顔山趙信城とし、漢書武

帝紀には(元狩)夏大將軍衛青將四將軍出定襄……

青至幕北、圍單于、斬首萬九千級至闊顔山乃還と

記せり。

此丈にては闊顔山の位置不明なるも漢書匈奴傳

に其年(武帝征)……單于(狐鹿姑)聞漢兵大出、悉遣其

輜重、徙趙信城、北邸郅居水とありて趙信城は北方

郅居水を控へし事知らるる故、今郅居水の位置よ

り求めん。同傳に(征和三年)又……貳師(李廣利)由是……

欲深入要功、遂北至鄯居水上、虜已去、貳師遣

護軍、將二萬騎、度鄯居之水、……貳師……引兵

還至速邪烏燕然山師古曰速邪烏地名也燕然山在其中燕音一千反とありて燕然

山は前に考定せし如く肯特山にて、速邪烏は師古

の説の如く地名とせば、鄯居水は即今のセレンガ河

の稱ならんと考へらる(オルコン河を合せし下流の部

分)。而して魏書蠕々傳に眞君四年(太武帝)車駕幸漠

南、分四道、……車駕出中道……車駕至鹿渾谷、

與賊相遇、吳提遁走、追至額根河擊破之、車駕至石

水而還とある石水は即鄯居水ならんと考へらる。

額根河はオルコン河なり。但し石水は同じセレン

ガ河にても上流ならんと考へらる。兔に角鄯居水

をセレンガ河とする時その南にありてふ竇又顏顏山

は後世セレンガ・オルコン兩河の間に設けられし

突厥の庭なる都斤山(又鬱都軍山)と同一地ならん

と考へらる。

(一) 浮苴井 未詳

(ト) 匈奴河水

史記匈奴傳に武帝元鼎六年の條に

漢又遣故從驃侯趙破奴萬餘騎出令居數千里至匈

奴河水而還、亦不見匈奴一入(案臣瓚云河水名、去令居千里)とあり、

漢書同條注には臣瓚曰水名也、去令居千里、劉敞曰

趙破奴傳但云至匈奴、此衍奴字、劉敞說同とあり、

更に同事實を武帝紀につきて見るに匈奴將軍趙破

奴出令居、皆二千餘里、不見虜而還臣瓚曰匈奴水名在匈奴中、去令居千里、見匈奴傳、師とあり、又漢書趙破奴傳には後一歲爲匈奴將軍攻胡至匈奴水、無功とあり、この匈奴河水(注

釋家の意見によれば匈奴水と云ふ方良し)の位置

如何。里數は注には千里と見ゆるも本文によりて

二千里餘とする方正しきが如し。扱令居が金城郡

下の一縣なる事は漢書地理志に見え楊守敬の水經

注圖によれば今の甘肅省涼番道平番縣の少許西北

に當る。よつて考ふるに里數上今の外蒙古土謝圖

汗と三音諾顔の境なる翁金河オンギンは即匈奴河水ならん。而して今漢書匈奴傳を見るに武帝征和三年の漢北大攻伐を誌せし條に匈奴使大將與李陵將三萬餘騎追漢軍至浚稽山、會轉戰九日、漢兵陷陣卻敵、殺傷虜甚衆、至蒲奴水、虜不利還去とありて浚稽山はアルツイボグド山なれば此に見ゆる蒲奴水は即匈奴河水と同一ならんと考へらる。従つて蒲奴水即匈奴水が原名ならざるやと考へらる。

翁金河については齊召南水道提綱卷廿三「西北阿爾泰山以南諸水」條に翁金河亦曰甕金河云々と見えたり、又張穆蒙古游牧記七土謝圖汗左翼後旗條に翁金河及その豬する胡爾哈鄂倫諾爾の事見え又同書八賽音諾顔右翼中左旗條にも見ゆ。其文に……翁金亦作翁吉又作甕金云々於大漠豬爲呼拉喀烏浪諾爾、周二十餘里、康熙三十五年聖祖親征噶爾丹、詔西路大軍由甕金進云々……雍正九年十一月命原任將軍來文往翁吉地方、修築城垣、十年

二月原任巡撫布蘭泰奏稱翁吉地方並無樹木、土少沙多、不能修城とありて聖祖準噶爾征伐には翁金河により北上せし事知らる、此等を併考し愚生は匈奴河水を今の翁金河とせん。

(チ) 受降城

史記匈奴傳に是歲武帝太初元年漢使貳師將軍廣利西伐大宛、而令因杆將軍救敷誤築受降城……其明年太初二年

……單于發左方兵擊泥野、泥野侯行捕首虜數千人、還未至受降城、四百里……匈奴兒單于大喜遂遣奇兵攻受降城、不能下、乃寇入邊而去……此に見ゆる受降城は漢武帝太初元年に漢の出城として田杆將軍公孫敖をして築かしたるものなり。而して諸處に散見せる記事によりその要地たる事知らるるも其位置決定は仲々に困難なり。されど漢書匈奴傳下に(呼韓邪)單于自請願留居光祿塞下師古曰即徐自爲築者也有急保漢受降城、漢遣某々……又發……送單于(呼韓邪)出朔方雞鹿塞師古曰朔方臨涇縣西北とあり、更に漢書匈奴傳上、宣帝本始二年

の漠北征伐の條に……祁連將軍(明田廣)出塞千六百里(河西河)至雞秩山とあるを同書田廣明傳の同事實を誌せし條には出塞至受降城とあれば此により受降城と雞秩山とは同一地點なる事即雞秩山に受降城の築かれし事想像せらるなり、尙前掲本始二年の記事によれば受降城は西河郡(治富昌縣—オルドス右翼中旗の少許北)を出づる千六百里(當時の千里里せば大約千百里なり)の地なる事即大體オルドスの北方に當る事知らる、今更に漢書李陵傳を見るに(陵)以九月發出遮虜障、至東浚稽山南龍勒水上、徘徊覘虜即亡所見、從泥野侯趙破奴故道抵受降城休士(師古曰抵歸也)とありて、遮虜障は前述の如く張掖郡居延縣にある障(所)名にてその居延縣は今の居延澤(ガシウソノール)の東南に當れり(西套蒙古、額濟納舊土爾扈特の地)浚稽山は別掲の如く今の三音諾顔のアルツイボグド山脈にて東浚稽山は即その東の部分なり、其の南なる龍勒水はアルツイボグド山脈の東の部分の少

許南なるトルチゲンゴル附近の無名の一小内河なるべし、扱前掲漢書李陵傳に立歸り考ふるに李陵は今のガシウソノールを出で北東行しアルツイボグド山に沿ひ東南行し一小内河附近に至り匈奴の姿なき故かへりて受降城に至れりとなり、故に受降城が雞秩山上に築かれオルドスの北方なる事を併考せば、その漠北の要地なることを思ひ、アルツイボグド山脈(浚稽山)及び之に南接するグルハインサイハン山脈(涿邪山)の更に南なる三音諾顔及土謝圖汗境上のフルフ、山附近は即その故地ならんと考へらる、而してフルフ山は現今オルドスより庫倫方面に至る交通路に當りその山南には此の南北路に對し東西路の交叉點あり、漢書匈奴傳に明年(昭帝始(匈奴)元五年)復遣九千騎、屯受降城以備漢、云々とあるは受降城の交通の要地なるを示すなり。

受降城なる名稱は唐代には三受降城としてあらはれ、唐の中宗神龍三年張仁愿が突厥の南下を防

ぐべく河北に河沿ひに築ける東西中の三城はこれなり、これ蓋範を漢代にとれるなり、但し漢代のものは今少しく北方に存せしなり(唐書卷一百十一張仁愿傳、卷卅七地理志一豊州條下參照)

(リ) 浚稽山

史記匈奴傳に(チ)受降城に關聯して

其明年(太初二年)春、漢使浞野侯破奴將二萬餘騎出

朔方西北二千餘里、期至浚稽山而還、浞野侯既至

期而還(索)應劭云在漢書師古俊音俊、稽(隱)武威縣北(注)首難在武威北、浞野侯

即趙破奴は此時還る途中匈奴に生擒せられし事は

此の續文及武帝紀列傳等に見ゆ。即ち漢書武帝紀

(太初二年)……秋蝗、遣浚稽將軍趙破奴二萬騎出朔

方、擊匈奴不還(應劭曰浚稽山在武威塞北、匈奴常所以爲障蔽)……とあり、今此

の浚稽山の位置を求めんに漢書武帝紀征和三年漢

北大攻伐の條に……匈奴入五原、酒泉殺兩都尉、三

月……重合侯馬通四萬騎出酒泉城至浚稽山、與虜

戰、多斬首、通至天山、虜引去、とあり。

以上により綜合するに浚稽山は朔方郡(治三封縣……オルドス右翼後旗)の西北二千餘里なる事、

武威縣(塞)又(武威郡下、楊守敬は今の甘肅省甘涼道鎮番縣北亦不喇山附近とせり、今此に従ふ……水經

注圖)の北なる事、酒泉郡(治祿福縣……今の甘肅省安肅道酒泉縣……揚氏水經注圖)よりも至り

得る事等知らる、更に其の位置を確むるは漢書李

陵傳の記事なるが、それによれば浚稽山は東西ありて獨立山に非ずして山脈なる事及び匈奴が此地

方に多く遊牧せし事知らる、尙同傳にその位置を

……陵於是將其步卒五千人出居延北行三十日至浚

稽山止營……と誌せり、以上により考ふるに浚稽

山は三音諾顔のアルツイボグド山脈なり。

居延は漢書地理志下張掖郡下に見ゆる縣名なり、その注に居延

澤在東北、古文以爲流沙、都尉治、莽曰居成、師古曰胡駟云武帝使

伏波將軍路博德築遮虜障於居延城とあり、路博德が遮虜障を居

延城即居延縣に築きしは史記匈奴傳によれば武帝太初三年の事

なり、居延縣はその位置居延澤在東北と云へば居延澤の西南に

當れる理なり、更に張掖郡治たる牂得縣の注に羌谷水出羌中、東北至居延入海云々とあれば居延縣は居延澤の西南にて澤に近き事知らる、百萬分東亞輿地圖昌寧湖の部分によるに羌谷水は坤都倫河にて居延に到りて海即居延澤即今のガシアン、ノールに入ると云へば居延縣は澤に近く今の坤都倫河に臨みしなるべく従つて遮障も此にありしなるべし、居延なる名稱は其後、後漢書郡國志に涼州下張掖、居延屬國として見え晉書地理志に又涼州下に西海郡の一縣として見え以後はなし、されど元地理志甘肅等處行中書省での亦集乃路は即居延縣なる事次の記事により知らる……亦集乃路下在甘州北一千五百里、城東北有大澤、西北俱接沙磧、乃漢西海郡居延故城、夏國管立威福軍、元太祖二十一年内附、至元二十三年立總管府、とは即之なり……但し上文中漢西海郡云々あるは晉の誤なり、又蒙古遊牧記卷之十六額濟納舊土爾扈特蒙古游牧所在の劈頭にも居延の沿革詳に見えたり

附言……流沙(省く)

(又) 盧陶

史記匈奴傳に

是歲太初三年也、匈奴單于立、漢使光祿徐自

爲出五原塞

(正) 即五原郡榆林塞也、在

驪州榆林縣四十里也、數百里遠者千餘

(漢書餘

字なし) 里、築城障列亭

(正) 顧胤云鄯山中小

至廬胸(集解)

前漢匈奴地名略攷 (胸非)

音衛服虔云盧匈奴地名 (正) 括地志云五原郡相(稱)陽縣、北出也、張晏云山名也 (義) 石門障、得光祿城、又西北得支就縣、又西北得頭曼城、(漢書地理志) 庫河城となれるが正しきが如し、即ち他は皆城名なるに之のみ河名とな

れるは可笑し、牢城河は牢河城の誤り、牢河城は庫

河城が誤りしならん

(又西北得

漢書地理志宿虜城

とある方正し)

按即築城障列

亭至廬胸也 (此に見ゆる括地志の文

は漢書地理志五原郡朔陽縣下の原注なり)とあり。

五原塞は五原郡下の塞の意にて漢書地理志によ

るに蓋し朔陽縣なり今其位置を考へんに五原塞を

説ける史記正義の文には脱文あるが如ければ水經

注圖(揚氏)によるに今のオールドス左翼後旗の河の

對岸の少許東なり即包頭の西なり、而して史記の

云へる遠者千餘里と至廬胸とは同一地點を指せる

が如ければ五原塞より千餘里の處に廬胸ある理な

り、而して其の方向は西北至廬胸(廬廬通)と漢書

武帝紀の同事實を云へる條にあれば(括地志の文

も同じ)此により躬胸城(他の地名皆何々城とあれ

とあり、此に見ゆる疆弩都尉は即路博德にて史記路博德傳に……其後坐法失侯、爲疆弩都尉屯居延卒とあれば一生居延にありしにて因杆將軍敖（公孫敖なり）と涿邪山に會せる時も亦居延を出しなるべし。

以上にて涿邪山は西河郡・居延縣の二地を出し方向に當る事知らる西河郡（治富昌縣）はオルドス左翼中旗の北に當り居延即張掖郡居延縣は甘肅省外ガシウンノールの西南なるは別にどけり、以上にて涿邪山の全體の方向知らるゝなるが後漢書匈奴傳には涿邪山の名屢々見えその和帝永元二年條に云へり、於是遣左谷蠡王師子等將左右部八千騎出雞鹿塞塞在朔方郡靈州縣西北中郎將耿譚遣從事將護之至涿邪山乃留輜重分爲二部、各引輕兵兩道襲之（于）、左部北過西海至河雲北河雲匈奴地名右部從匈奴河水劉敞曰案匈奴水自是水名妄出奴字西繞天山、南度甘微河、二軍俱會、夜圍北單于、大驚、此文にては左谷蠡王及中郎將耿譚の遣

せし従事の何れが左部右部を率ゐしか不明なるも同事實を誌せし後漢書和帝紀永元二年條に南單于遣左各蠡王師子左各蠡匈奴王號師子其名也出雞鹿塞擊匈奴河雲北、大破之、とあるにより左各蠡王は左部を率ゐる従事は右部を率ゐし事知らる、匈奴河水は先にトにて考證せし如く今の三音諾顔の翁金河なる故又左谷蠡王は雞鹿塞を出で此塞は朔方緜渾縣の西北にありと云ひ此縣は河北騰格里泊（屠申澤・又緜渾澤）の少許西にある故又居延即ガシウンノールを出づるも西河郡即オルドス左翼中旗を出づるも皆涿邪山に到りうると云ふ故彼此參考して涿邪山は即三音諾顔と土謝圖汗の境なるグルハンサイハン嶺なるべし。

扱涿邪山がグルハンサイハン嶺水道提綱廿三の古爾板峽漢嶺にて匈奴河水が翁金河なる以上先に引ける後漢書匈奴傳の右部從匈奴河水西繞天山、南度甘微河の天山は普通の天山に非ざらん、愚生は此の匈奴中の

天山は形勢上今の抗愛嶺ならんと考ふ、従つて甘微河とは源を罕蓋嶺に發して西北流して科布多の奇爾吉滋淖爾水道提綱廿三の奇勒穆思鄂模に注ぐ巴洽河に注ぐ提綱の查な 匪益河流域附近の

るべし、而してかく考ふる時、後漢書竇憲傳の金微山と此に見ゆる甘微河の金微、甘微は同一音を寫せる異字なるべし、即ち同傳に明年復遣右校尉耿夔・司馬任尙・趙博等將兵擊北虜於金微山、大破之、克獲甚衆とあるは此なり、今、同じく後漢書

四十耿夔傳を見るに、同事實を誌して二年和帝永元復

出河西、以夔爲大將軍左校尉將精騎八百出居延塞直奔北單于廷、於金微山斬闕氏名王已下五千餘級單于與數騎脫亡、盡獲其匈奴珍寶財畜、去塞五千餘里而還、自漢出師所未嘗至也云々とあり、愚生は金微・甘微同音異字とし金微山とは甘微河源なる罕蓋嶺中の一峯名とせん。

扱左部は涿邪山より北過西海、至河雲北より右部と會せりと云ふなれば河雲とは匪益河流域附近の

地名ならん、又西海は他處にも見ゆるも此文に於けるは涿邪山を發して此の山脈に沿ひ西行したりと考ふる時其位置上匪益河の南なる札薩克圖汗中右翼末旗の所在地なる察罕淖爾と考へらるべし、蒙古游牧記十札薩克圖汗同旗條下に察罕諾爾の事を誌せり、これにより此地方の地味豊かなること及準噶爾征伐のため附近の察罕瘦爾山に察罕瘦爾城の築かれし事など知らるゝなり。

元の耶律鑄の雙溪醉隱集卷二樂府條に涿邪山の詩ありてその李文田箋に涿邪即朱邪即處月と聲轉するとしその地を蒲類海（今のロブ・ノール）の東としたれど如何にや。

(ヲ) 余吾水

史記匈奴傳に

後二歲武帝天漢四年復使貳師將軍將六萬騎步兵十萬出

朔方、彊弩都尉路博德將萬餘人與貳師會、遊擊將軍說（韓說）將步騎三萬入出五原、因杆將軍敷（敖）

誤)將萬騎歩兵三萬人出雁門、匈奴聞悉遠其累重於余吾水北、而單于以十萬騎待水南、與貳師將軍接戰……因杆敷與左賢王戰、不利引歸、(集)徐廣曰解(余一作對、(案)山海經云北鮮之山鮮音邪、(隱)水出焉北流注余吾は誤)傳に索隱は余吾に注して余音餘、又音徐、案水名在朔方と云ひ漢書同傳に注して師古は水名也、在朔方北と云へり(索隱の朔方の下には北字を脱せしなるべし)

朔方郡(治三封縣)は今のオルドス右翼後旗に當り五原郡(治九原縣)は今の綏遠特別區域の包頭の西北に當る、又雁門郡(治善無縣)は山西省雁門道右玉縣附近なり、此等の三郡を出し諸將は單于及左賢王と戰へりと云へば此の戰は匈奴の左方即東方に於て行はれしにて勢ひ余吾水も亦此方面に求めらるべし、且つ公孫敖傳によれば朔方郡の北に當れり、又漢書匈奴傳に武帝征和三年の漠北大攻伐を誌せし條に左賢王驅其人民、度余吾水六七百

里居兜銜山と誌し直ぐ續文に單于自將精兵左安侯度姑且水と並書せるがこれは共に漢軍の銳鋒を避けて北遁せるを示せり、安侯は後漢書竇憲傳に見ゆる燕然山の班固の銘に遂踰涿邪跨安侯、乘燕然……の安侯にて水名なり、涿邪山はグルハンサイハン嶺燕然山はオノン河源肯特山なれば安侯水は位置均合上オルコン河ならん箭内博士は東洋讀史地圖に同説を示されたり、今之に贊す、而して北遁して左安侯と云へば度姑且水の姑且水は蓋しトラ河ならん、かく考ふる時之と並書せられし余吾水は蓋しケルレン河ならん、愚生はしか信するなり、ケルレン河は匈奴の左方即東方に當り左賢王の地として妥當なるを覺ゆればなり、又余吾水即ちケルレン河を渡りて六七百里の兜銜山とは里數上オノン河南の額林達班嶺中に求めらるべし、今地圖を見るに余吾水即ケルレン河に從つて又オノン河以南にありては額林達班嶺の外には目標たる

べき山彙なし、故に兜銜山即額林達班嶺とするなり。

De groot は余吾 *ungga* 即 *ungga* として余吾水をウルガに近きトラ河に比定せしもウルガ即余吾説には従ひ難し、何となればウルガは全く後世の稱呼なればなり。

以上にて史記及漢書匈奴傳に共通に見ゆる匈奴地名につき聊か管見をのべたるが首に斷れる如く天山・邦連山の如き或は流沙の如き大家の手に扱はれ又古來著名にて論述多きものは一切之にふれず餘の地名のみにつきのべたり。

もしそれ等につき何等のとりえあらば小生の甚幸ひとする所なり、他の匈奴地名につきては別のぶる事あるべし。